

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2021

課題番号：20K13033

研究課題名(和文) 認知的変化表現の日中韓対照研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study of Expressions of Cognitive Change in Japanese, Chinese, and Korean Languages

研究代表者

上田 裕 (UEDA, Hiroshi)

大東文化大学・外国語学部・講師

研究者番号：00733619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：単純状態を叙述する「なっている」と「変化」を表す中国語の文末助詞“了2”、韓国語の「-key toy-e iss-ta (-</>になっている)」の成立条件について、2つの対象を比較する状況を中心に考察し、主に以下の点を明らかにした。“了2”は「なっている」に比べて、単純状態を叙述する認知的変化表現として成立しやすい。「-key toy-e iss-ta」は認知的変化を表すことはできず、a)対象に差が存在することに相応の意味があることを把握している状況、b)(結果的に)対象に差が存在するかたちでつくられたこと自体を問題とする状況で、被動的変化の結果を表す表現として成立する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日中韓3言語の変化表現およびそれを含む言語形式「-</>になっている」、文末助詞“了2”、「-key toy-e iss-ta (-</>になっている)」が、比較の状況で、実際の変化を読み取れない単純状態を叙述するのに必要な条件を解明することにより、各言語の話者が当該の事態をどのようにとらえて表現しているかを明らかにした。これまでは、2つの対象を眼前で比較する状況で、話し手が認識上の変化を読み込むための条件について、十分な考察がおこなわれてこなかったが、本研究を実施することにより、その一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The current study considered the conditions affecting the formation of sentences in which two objects are compared using the Chinese sentence-ending particle “le 2”, which describes the simple states, and the Korean expression “-key toy-e iss-ta” (-ku / ni natteiru in Japanese). The main findings were as follows. First, “le 2” is more likely to form cognitive change expressions that describe a simple state than “natteiru.” Second, “-key toy-e iss-ta” cannot be used to represent the cognitive changes that can be represented by “natteiru” or “le 2,” instead of expressing either situations where the speaker understands that the existence of differences between the objects has a reasonable meaning or situations where (as a result) the existence of differences between the objects is itself viewed as a problem.

研究分野：中国語学

キーワード：比較 変化 単純状態 形容詞 属性 -</>になっている 文末助詞“了” -key toy-e iss-ta

1. 研究開始当初の背景

単純状態を叙述する認識的变化表現「-く/になっている」の成立条件については、「基準・期待値からの逸脱」、「とらえられた状態に対する解釈」等の観点から説明されている。しかし、「AはBよりCくなっている」のような、比較表現で用いられる「-く/になっている」には、そうした観点から説明できない例が存在する。また、「変化」を表す中国語の文末助詞“了2”と韓国語の「- (-く/になっている)」が、比較の状況で認識的变化表現として用いられるための条件は明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究は、単純状態を叙述する「-く/になっている」と中国語の文末助詞“了2”、韓国語の「- (-く/になっている)」が、2つの対象を比較する状況で認識的变化表現として成立するための条件を明らかにする。

3. 研究の方法

例文はできる限りコーパスや小説、新聞などから収集する。作例をおこなう場合には、インフォーマントに許容度判断を依頼する。収集した用例が用いられている具体的状況を観察するだけでなく、考察対象の表現がどのような状況で不成立であるかということも確かめ、当該表現が成立するための条件を認知的な観点から探る。

4. 研究成果

[研究発表]

上田裕 2020. 「認識的变化表現の日中対照 比較の状況を中心に」, 大東文化大学語学教育研究所 2020 年度第 2 回研究発表会, 大東文化大学, 11 月 30 日。(査読無)

[研究論文]

上田裕 2022. 「比較の状況で用いられる「- (-く/になっている)」の成立条件 「-く/になっている」との対照の観点から」, 『朝鮮語研究 9』: 121-136 頁。朝鮮語研究会。(査読有)

上田裕 2021. 「認識的变化表現の日中対照 「なっている」と文末助詞“了”を用いた比較表現を中心に」, 『日本語学研究』第 67 輯: 87-105 頁。韓国日本語學會。(査読有, KCI 搭載誌)

上田裕 2020. 「認識的变化表現「なっている」の成立条件 比較の状況を中心に」, 『日本語学研究』第 65 輯: 97-114 頁。韓国日本語學會。(査読有, KCI 搭載誌)

本研究は、「認識的变化」を認識上で主観的にみとめられる変化と定義し、単純状態を叙述する認識的变化表現「-く/になっている」および「変化」を表す中国語の文末助詞“了2”、韓国語の「- (-く/になっている)」の成立条件について、2つの対象を眼前で比較する状況を中心に考察した。

「なっている」は、変化自動詞「なる」に持続を表す「ている」が接続した形であり、主に変化後の結果状態の叙述に用いられる。しかし、次の a における「なっている」は、「右のビルは左のビルより高い」という、実際の変化を読み取れない単純状態を叙述している。この状況では、b に示すような変化を表す“了2”文も成立する。

(互いに隣接するほぼ同じ高さの高層ビルをはじめて見て)

a. 右のビル、左のビルよりちょっと高くなってるでしょ。

b. 右边的楼 比 左边的楼 稍微 高 了 一点。
右のビル ~より 左のビル やや 高い (変化) 少し
(右のビルは左のビルより少し高くなっている。)

c. (#) / #

右側 ビル 左側 ビルより 少し 高 くなっている でしょう

(右のビル、左のビルよりちょっと高くなってるでしょ。)

(「#」と「(#)」はそれぞれ語用論的に不自然、やや不自然であることを示す。)

a と b における話し手は「2 棟のビルの高さは一見同じくらいに見える」という前提と「右のビルは左のビルより高い」という眼前の状況との差異を变化ととらえて、変化動詞「なる」を含む「なっている」と“了2”を用いていると考えられる。そうした認識上の差異は、叙述される属性を X とした場合、「一方の対象がもう一方の対象よりも X くなる」という変化の図式でとらえられている。a と b では、認識上の差異が「右のビルが左のビルより少し高くなる」という仮想的な変化として表現されているのである。a と b は、眼前の状況を知覚することにより、ビル

の高さに関する話し手の認識が更新されたことを表しているといえる。一方、cが不成立であることからわかるように、「- (-く/になっている)」は「-く/になっている」や“了2”が表し得るような認識的变化を表すことはできない。

初年度は、まずaのような「-く/になっている」について考察し、その成立条件を以下のようにまとめた。

- (1) 比較の状況で「-く/になっている」が認識的变化表現として用いられるとき、話し手は、比較する両者の属性は同様であるという前提と、眼前の状況に対する認識の差異を「変化」ととらえている。そうした認識上の差異は、叙述される属性をXとした場合、「一方の対象がもう一方の対象よりもXくなる」という変化の図式でとらえられる。
- (2) 比較の状況で認識的变化表現「-く/になっている」を用いるためには、叙述される属性差が小さくなければならない。比較する両者に差異がないという前提がある場合、「-く/になっている」は認識的变化表現として成立しやすい。
- (3) 対象の大きさに着目して「-く/になっている」を用いるためには、比較する両者の大きさと形状が(ほぼ)同様でなければならない。その理由は、時間の推移に伴って同一の事物に生じる変容という典型的な変化との類似性を確保する必要があるためである。
- (4) 対象の高さに着目して「-く/になっている」を用いる場合、比較する両者の形状は必ずしも同様である必要はない。その理由は、対象の高さに着目する場合、対象の最上部に認知的な焦点が当てられることにより、比較に際して、対象の種類や形状の違いが背景化されるためである。
- (5) 内在的な力によって変化する背丈や体の大きさを比較して叙述する状況では、実際の変化に焦点が当たるため、「-く/になっている」を認識的变化表現として用いることはできない。ただし、腕の長さについては、内在的变化に焦点が当たりにくいいため、これを比較して叙述する状況で、「-く/になっている」を認識的变化表現として用いることができる。
- (6) 空間的な量のほか、明るさ、色、色の濃淡、量の多寡、傾斜の角度、曲がりかたといった属性を比較する状況では「-く/になっている」が認識的变化表現として成立する。「-く/になっている」は、こうした視覚によってとらえられる属性を比較する状況で、認識的变化表現として広く用いられる。
- (7) 比較の状況において、評価的な意味を含む形容詞は「-く/になっている」と基本的に共起しない。評価的な意味を含む形容詞によって表される属性は、その差を客観的に把握可能な量として完全なかたちで示すことがきわめて難しいためである。

次に、“了2”の成立条件について、「-く/になっている」と対照して考察した。“了2”を用いた文は、話し手が2つの対象の属性に差があることを認識した状況で、認識的变化表現として用いることができる。ただし、「形容詞+“了2”」では認識的变化を表せず、“了2”の直後に2つの対象の差の量を表す数量表現“一点(少し)”などを加える必要がある。2つの対象の属性差が大きい場合にも、“了2”の直後に数量表現“很多(たくさん)”を加えれば、認識的变化を表すことができる。“了2”を用いた場合、話し手あるいは聞き手がもつ前提とは異なる事実をとりたてて述べる表現になり、驚きや意外な気持ちを表すことができる。

「-く/になっている」と“了2”の成立条件の共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

[共通点]

- (1) 話し手が同様であると思っていた2つの対象の属性がわずかに異なると認識した状況で用いることができる。
- (2) 形状と種類が異なる2つの対象の高さを比較する状況で用いることができる。
- (3) 空間的な量のほか、明るさ、色の濃淡、量の多寡、傾斜の角度、曲がりかたといった視覚によってとらえられる属性を比較する状況で、認識的变化表現として広く成立する。
- (4) 評価的な形容詞と共起しにくい。

[相違点]

- (1) 形状と種類が異なる2つの対象の大きさを比較する状況で、「-く/になっている」文は成立しないが、“了2”文は成立する。
- (2) 背丈のように内在的な力によって変化する対象を比較して叙述する状況で、「-く/になっている」文は成立しないが、“了2”文は成立する。
- (3) 比較対象が眼前に存在しない状況で「-く/になっている」文は基本的に成立しないが、比較対象の大きさを具体的に想起しやすい場合や2つの対象の属性が同様であるという背景知識に基づく前提がある場合には成立する。“了2”文は、そうした前提がなくとも成立する。
- (4) 対象が必要とされる大きさ、高さという臨時に設定された基準に合致しないことを述べる状況で「-く/になっている」文は成立しないが、“了2”文は成立する。

以上より、“了2”は「-く/になっている」に比べて、単純状態を叙述する認識的变化表現として成立しやすいことが明らかとなった。

次年度は「- (-く/になっている)」の成立条件について考察した。「-」は変化自動詞「 (なる)」に連結語尾「- (-く/に)」と結果持続表現「- (-ている)」が付加された形式である。先行研究では、「- (-く/になる)」は被動的な状態変化を表すとされており、その意味的性質は「- (-く/になっている)」にも反映されていると思われる。

本研究により、「- (-く/になっている)」は「-く/になっている」や“了2”が表し得るような認識的变化を表すことはできず、対象に差が存在することに相応の意味があることを把握している状況や、(結果的に)対象に差が存在するかたちでつくられたこと自体を問題とする状況で成立することが明らかとなった。これらの状況で「- (-く/になっている)」を用いる話し手は、比較する両者の属性に差異がないという前提と眼前の状況に対する認識の差異を「変化」ととらえているのではなく、眼前の状況が被動的な状態変化の結果であることを述べていると考えられる。また、「- (-く/になっている)」は、「-く/になっている」や“了2”と同様に、評価形容詞とはなじまない。

日本語学では、単純状態を表す「-く/になっている」の用法について、多くの研究がおこなわれてきたが、2つの対象を眼前で知覚した際に認識的变化表現として用いられる例については、十分に検討されてこなかった。“了2”や「- (-く/になっている)」も、こうした状況で用いられる例については、十分な考察がなされてこなかった。本研究は、従来見過ごされてきた状況類型と現象に着目し、当該表現の成立条件の一端を明らかにできたと考える。

今後は、本研究の成果に基づき、比較の状況に限らない認識的变化表現や主体移動表現について考察する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

| | |
|-----------------------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 上田裕 | 4. 巻 65 |
| 2. 論文標題 認識的变化表現「なっている」の成立条件 比較の状況を中心に | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日本語学研究 | 6. 最初と最後の頁 97-114 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14817/jlak.2020.65.97 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|-----------------------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 上田裕 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 認識的变化表現の日中対照 「なっている」と文末助詞“了”を用いた比較表現を中心に | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本語学研究 | 6. 最初と最後の頁 87-105 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14817/jlak.2021.67.87 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|----------------------------------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 上田裕 | 4. 巻 9 |
| 2. 論文標題 比較の状況で用いられる「-key toy-e iss-ta」の成立条件 「-く/になっっている」との対照の観点から | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 朝鮮語研究 | 6. 最初と最後の頁 121-136 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50986/koreanlinguistics.9.0_121 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 上田裕 |
| 2. 発表標題 認識的变化表現の日中対照 比較の状況を中心に |
| 3. 学会等名 大東文化大学語学教育研究所 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|